

構文研究の次なる四半世紀に向けて:

構文文法における 4 つの問題とその解法

1. はじめに

構文文法 (*Construction Grammar, CxG*) は提唱されてから既に四半世紀が経過し、理論的大成 (Goldberg 1995)、言語習得研究への応用 (e.g., Tomasello 2003)、コーパス分析・統計的アプローチとの合流 (e.g., Stefanowitsch & Gries 2003) など、多様な展開を見せているが、心理言語学的妥当性を持つモデルとなる上では、依然重要な「4 つの問題」を指摘することができる。本 WS では、この問題を各登壇者が指摘し、その解決策を提示するという形で、今後の CxG の新たな展開の可能性をさぐる。

2. データの問題

コーパスベースの構文研究は近年盛んであり、*Collostructional Analysis* (Stefanowitsch & Gries 2003) などは一つの確立した手法として認められるが、ある種の意味的な選好を排除してしまうがために誤った予測を行ってしまうことがある点や (Bybee 2010)、統計的な側面でも多様な問題点が指摘されている (Schmid & Küchenhoff 2013)。

このように万能・汎用の統計指標が確立されていない現状を鑑みて、本 WS では、(1) のような構文に含まれる 2 つの動詞の分析結果を提示しながら、多用な統計指標とデータとの対応を検討し、また自動詞移動構文との機能的な違いを例に、データの「可視化」を通じた質的分析の可能性も提示していく。

(1) John came running into the room.

3. 獲得の問題

構文の獲得研究としては、観察・実験・コーパス分析に基づいた様々な研究が行われており (e.g., Tomasello 2003; Goldberg 2006)、これまでに十分な議論が行われてきているように思われるが、Goldberg (2006) の議論や分析には、習得の際に幼児の心内でいったいかなる入力をどう処理しどのような出力が得られているのか、ということを一貫的に説明する「モデル」が欠如しており、一貫した説明が与えられているとは言い難い側面がある (Bod 2009)。Tomasello (2003) の議論に対しても同種の指摘がある (大津 2008)。

本 WS では、ヒトの一般的な推論メカニズムとして近年研究の盛んなベイズ推論 (e.g., Xu & Tenenbaum

2007) を援用し、Tomasello (2003) らが立脚する「用法基盤モデル」をベイズ推論の一種として実装する、「ベイズ推論としての用法基盤モデル」というアプローチの可能性を、実際のデータへの適用例を示しつつ探求する。

4. 理解の問題

獲得と並んで、言語の理解・産出という「処理」の問題も心理言語学において重要な側面であるが、CxG においてこの側面に関する議論はあまりなされていない。例えば特定の構文 (e.g., Way 構文) において、ある文の対 (e.g., (2a), (2b)) の容認性の違いを議論する際に、「そもそもなぜその文が他の構文 (e.g., 自動詞移動構文) でなく他ならぬその構文であると分かるのか?」という、構文の理解、或いは「認識」の問題は多くの場合不問のままである:

- (2) a. He made his way into the room.
b. *He walked his way to the store.

そこで本 WS では、構文の実態を、記憶されている具体的な文事例の集合を想起した際に生じる「効果」であると仮定し、その具体事例の記憶に付与された具体的な単語配列の情報 (e.g., [...his way into...]) を活用して構文の認識を行っている、とする「事例基盤構文理論」という理論を提示し、具体的な構文の分析例とともにその妥当性を検証する。

5. 産出の問題

上述のように、構文の産出プロセスに関する研究も十分に尽くされているとは言い難い。この問題は、一つには同様の事態を表現するのに複数の実現形式があった際に、最終的になぜ、どのような要因から特定の一つの形式が選択されたのか、という、「表現選択の問題」を含む。

これは部分的には「構文交替」の研究として旧来からなされてきたものであるが (e.g., Levin 1993) 以下のような、単一の節構造 (e.g., (3a)) で表されるものと複文構造 (e.g., (3b)) で表されるものとの対は通常構文交替とは呼ばれない:

- (3) a. John talked himself hoarse.
b. John talked until he became hoarse.

本 WS では、このような表現対を主に英語の結果構文を例に検証し、表現選択にいかなる要因が作用

しているのか、意味的・機能的な側面も含め検証し、可能な説明を試みる。

主要参考文献

- Bod, R. (2009). Constructions at work or at rest? *Cognitive Linguistics*, 20(1), 129–134.
- Bybee, J. (2010). *Language, usage and cognition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Goldberg, A. E. (1995). *Constructions: A construction grammar approach to argument structure*. Chicago; London: University of Chicago Press.
- Goldberg, A. E. (2006). *Constructions at work*. Oxford: Oxford University Press.
- Levin, B. (1993). *English verb classes and alternations: A preliminary investigation*. Chicago: University of Chicago press.
- 大津由紀雄. (2008). 一生成文法研究者から見た「言語獲得の用例基盤モデル」. 日本認知言語学会第9回全国大会ハンドブック (pp. 255–258).
- Schmid, H.-J., & Küchenhoff, H. (2013). Collostructional analysis and other ways of measuring lexicogrammatical attraction: Theoretical premises, practical problems and cognitive underpinnings. *Cognitive Linguistics*, 24(3), 531–577.
- Stefanowitsch, A., & Gries, S. T. (2003). Collostructions: Investigating the interaction of words and constructions. *International journal of corpus linguistics*, 8(2), 209–243.
- Tomasello, M. (2003). *Constructing a language: A usage-based theory of language acquisition*. Cambridge, MA.: Harvard University Press.
- Xu, F., & Tenenbaum, J. B. (2007). Word learning as Bayesian inference. *Psychological review*, 114(2), 245–72.